

# 甘木絞りの基礎知識②～九州の絞りについて～

## 1. 高瀬絞り

寛永15（1638）年に松江重頼著『毛吹草』<sup>けふきぐさ</sup>という俳諧<sup>はいかい</sup>の代表的作法書に全国の特産品が列挙され、その中で肥後国に「高瀬絞木綿」、豊後国に「絞木綿」の文字が見える。また『肥後国検地帳』には、寛永10（1633）年の合志郡<sup>ごうし</sup>上生村に「しほりくや（絞紺屋）」があったという。これらのことから、江戸時代初期（17世紀前半）には肥後国や豊後国ですでに絞り染めが始まっていたと考えてよい。九州における絞り染め文化の発生において重要なのは、肥後国高瀬や豊後国鶴崎がいずれも木綿や綿布生産に他地域に比べ早くから盛んだったということである（注1）。

文禄2（1593）年、朝鮮出兵の真ただ中にいた北肥後の領主であった加藤清正は重臣の下川左衛門尉・加藤喜左衛門へあてた書状（下川文書）「日本より取寄候物之覚」の51ヶ条37番目に「十張の木綿幕に加藤家の紋所である白輪抜きを幕一杯につけ、そのうちに桔梗も付けるように」とあり、この紋所が絞り染めで施された可能性はあるが、このころから江戸時代にかけての高瀬絞りがどのようなものであったのかという問題はなかなか解くのが難しい。なぜならば、高瀬絞りの作例はきわめて少なく復元が難しいからである。

## 2. 豊後絞り

高瀬絞りと同じころ九州島内で絞り染めを行っていたのが豊後国である。豊後絞りの起源について、絞り染め作家であり研究者である安藤宏子氏は絞り染めが南蛮貿易により、西アフリカ・マダガスカル島、インド、マカオを経て豊後にもたらされたという説を提示している。茶道具などを入れる仕覆<sup>しふく</sup>にインド・コロマンデル海岸から南蛮貿易でもたらされた古い更紗が使われていることは良く知られ、興味深い説といえる。

国内に目を向けてみると、豊後国は江戸時代になると小藩が分立するようになる。享和3（1803）年から編纂が始まった岡藩の唐橋世済による『豊後国志』には「土産」の項に、「絞染市 高田郷門田村出」と書かれている。門田村は現在の大分市鶴崎地区にあり、この地域は古くから木綿生産および藍染めが盛んな地域であった。また、鶴崎は小藩分立の時代、肥後藩の飛び地であった。肥後藩の人々



挿図1：木綿地白地夏掛布団（豊後絞り） 小林康浩氏撮影

が京、大坂、江戸へ向かうとき、久住を通して野津原で一泊し最終的に鶴崎港から出港する。この九州横断ルートは肥後街道として発展した。このように木綿生産や藍染めが盛んな豊後と肥後が非常に近い関係にあったことは、九州島内でこの両地域が江戸時代初期に絞り染め文化を開花させる大きな要因となったといえよう。

安藤氏が竹田市で発見した豊後絞りの作品は豊後絞りの生産や伝播<sup>でんぱ</sup>を考える上でも興味深い。挿図1 木綿地白地夏掛布団は佐藤キョウ氏（1840－1924）の作品で、江戸時代の記憶のある絞り手の作品として貴重なものである。鹿の子絞りや帽子絞り、巻き上げ絞り、蜘蛛絞りなどが見られ、夏用の掛け布団にふさわしく涼しげな作品に仕上がっている。彼女は高度な絞り技術を持っていたために「しほりばあちゃん」との愛称で知られた。

## 3. 別府絞り

別府絞りははじまりは、鶴崎など豊後絞りとの関係から江戸時代<sup>さかのぼ</sup>に遡る可能性はあるが現段階では判然としない。明治22（1889）年ごろより「血の池地獄」<sup>せきかっしよく</sup>の赤褐色の泥土を用いた簡易な絞り染めが「血の池鉋泥染」の名前で温泉土産品として、豆絞り、縫い絞り、板締め絞りを施した手拭、ハンカチなどが売られた。やがて温泉地一帯に「別府温泉絞り」として隆盛を極めたと言い、その年間の売上高は別府土産の竹細工を凌ぐまでになった。また、安藤氏は昭和初期の別府市流川近辺の町並みの復元を試みており、竹瓦温泉から流川通りの町並みに「みのや絞り店」「かねますや絞り店」「井上絞り店」「あさくの絞り本店」などの絞り店のほか「丸一針」などの針店が並び、相当に繁盛していた様子がわかる（注2）。

#### 4. 筑前絞り(甘木絞りと博多絞り)

筑前絞りの中でまず甘木絞りの初源を考えると以下の三説にまとめることができる。

①豊後の人、中津在住の医師である三浦氏の妻女が甘木地方に絞りを伝え、「三浦」と称した。

これは類似する伝承が有松・鳴海にある。豊後絞りを有松・鳴海に伝えたのが、竹中備中守の侍医である三浦玄忠の妻とする伝承である。これらと甘木での伝承を考えると、「三浦姓の医者」と「その妻女」が伝えたという伝承の骨格が同じである。甘木の絞り染めが豊後絞りから伝わったことを暗示している。

②豊後・中津木綿<sup>さら</sup>の晒しを行っており、豊後絞りの制作過程の一部を甘木で担っていた。

小石原川は水量豊富な清流で、石灰質を含んだ水質が木綿晒しに適しており、実際に中津木綿の晒しが盛んに行われていた。甘木絞りの布晒しは後年、筑前甘木名所十景になるほどだったといい、豊後から甘木に絞りの技術が伝わった可能性は高い。

③『福岡藩民政略誌』によると、福岡の孫兵衛を始祖とする紅絞りを施す博多絞りが甘木に伝えられた。

『福岡藩民政略誌』は長野誠により、明治20(1887)年に発行されている。その中の「博多絞の起源」には「博多にて木綿を繰績して染ること、其始をしらず。明和中に成りし石城志、博多土産考に、紅絞最美好なりとあるこそ、書に見えし始なれ。無名書に宗像郡福岡に孫兵衛というものありて、紅染せしを延享二年藩主命じて、福岡に移されたりとしるせり。もし是や後に博多に転居せしか。」と書かれている。

この記述から18世紀半ばには博多絞りが生まれていたと推測できる。さらに「甘木の木綿絞は、博多より伝えしか。今に至ては其盛なる事、博多に愈れり。」とあり、博多絞から甘木絞りの技術伝播を推測しているが、豊後絞りと甘木との近い関係は①②でみたとおりで、実状はそれほど単純ではないように思う。

江戸時代の風俗について書かれた喜田川守貞著『守貞漫稿』によると、文化・文政頃までは鳴海絞りを用いたが、天保年間(1830-43)には博多絞りを用いたと記されており、産業として発展している様子がうかがえる。また、明治10(1877)年に開催された第一回内国勸業博覧会の出品解説には、博多・甘木の絞り染めの年間生産額が全国一位と書かれており、大正3(1914)年には甘木の柳

原芳太郎氏が型付け絞りの特許を取得し、生産高は30～50万反に及び、販路は国内のみならず韓国や台湾にも拡大し、最盛期をむかえた。しかし、昭和17(1942)年に繊維類統制により博多絞り、甘木絞りともにほぼ休業状態となり衰退の道をたどる。昭和20(1945)年6月の福岡大空襲で福岡中心部の博多絞り店などは灰燼に帰したと言われ、昭和26(1951)年には、産業としての甘木絞りは終焉<sup>しゅうえん</sup>を迎える(注3)。甘木絞りについて主として使用される絞り技術は、鹿の子絞り、巻き上げ絞り、豊後(三浦)絞り、帽子絞り、縫い絞り、白影絞りなどがあるが、甘木絞りを特徴づけるのは、鹿の子絞りを多用するということができる。

一方で、博多絞りの作品について、平成27(2015)年に甘木絞り作家・研究家の樋口トミ子氏が500点近い一群を発見した。これらの作品は中洲川端に博多絞りの店をかまえていた武田虎雄氏旧蔵のもので、着物、反物、襦袢、布団、風呂敷など27種におよび、明治、大正、昭和にかけての博多絞りであった(注4)。これらは博多絞りの実像の一端を見ることができる奇跡的な発見であり、貴重な作品ということができるだろう。

武田虎雄氏は明治19(1886)年に生まれ、小学校を卒業後絞り店に入店し修行。明治45(1912)年26歳で博多絞り武田商店を開店している。大正年間に入ると、大正5(1916)年に大正天皇、大正9(1920)年に裕仁皇太子殿下(のちの昭和天皇)など皇族による買い上げの栄を賜っている。さらに農商務省工芸展覧会(後に商工省工芸展覧会)では入選入賞24回ということから見てもその絞り技術が高い評価をうけていたことがわかる。昭和19(1944)年の空襲で店舗消失により廃業するも昭和28(1953)年に営業を再開、有松・鳴海からも製品を仕入れていたことが記録にある。昭和37(1962)年再び閉店し、昭和39(1964)年に他界している。博多絞りの特徴は藍一色というより紅や黄色など多色にすることにあり、これは紅絞りを始祖とする博多絞りの伝統なのかもしれない。

(当館副館長 遠藤啓介)

注1: 玉名市立歴史博物館こころピア『企画展 高瀬絞り木綿の源流とその展開』1996年

注2: 安藤宏子『豊後絞りと有松鳴海絞り』『三浦木綿と三浦絞りの実像』『別府絞りの変遷を検証する』『西アフリカと日本の絞り』『絞り染め大全』誠文堂新光社 2013年

注3: 鈴木信康『筑前志ぼりの系譜』『九州産業大学芸術学部研究報告第11巻』1980年、甘木歴史資料館『甘木絞り』1991年

注4: 樋口トミ子『かつて生産量全国一を誇った筑前の絞り 甘木絞りの伝統をつなぐ』『染色情報α』染色と生活者 2016年



Amagi Historical Museum

◆発行日:平成29年10月11日

甘木歴史資料館

◆住所:〒838-0068 福岡県朝倉市甘木216-2

◆TEL/FAX:0946-22-7515

◆http://www.city.asakura.lg.jp/ama-reki/